

# あゆみ通信

VOL. 186

あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会) 会長 細川 克彦 広報 本持 喜康

## 親鸞聖人の教えに会う

「毎日『正信偈』のお勤め中に雑念が起こる。これでよいのか」とお尋ねですが、善いも悪いもない。そういう自分であることを受け止める以外、ありません。雑念を取り払おうとするのも我が思いであり、一種の雑念です。それでもいいから『正信偈』のお勤めを続けることをお勧めします。(中略)『正信偈』をお勤めすることとお念仏を申すことは同じです。(親鸞聖人が)お釈迦様の教説と七高僧の論釈によって、お念仏のいわれに感動された讃歌が『正信偈』です。いわばお念仏の心を親鸞聖人が全身全霊で受け止め表現されたのが『正信偈』であると言えます。

私たちは『正信偈』をお勤めすることによって、お念仏の響きを感じ、さらに聞法によってお念仏のいわれを聞くことが雑念を気にすること以上に大切なことかと思われまます。(真宗大谷派『銀杏通信』NO147より)

## 第2組聞法会

日時 10月22日(火) 14:00  
会場 佛足寺(天王寺区北河堀町)  
講師 廣瀬俊先生

(17組法観寺住職) テキスト 『初めての正信念仏偈』をご持参ください。

お持ちでない方は、受付でご用意します。

参加費 500円

## 第2組聞法会が開催

2024年9月6日(金) 午後2時から、天王寺区の専行寺で、組内の住職、坊守と門徒、推進員31名が参加して第2組聞法会が開催されました。



今回から廣瀬俊先生が『初めての正信偈』の「已能雖破無明闇～即横超截五惡趣」を担当されました。

墨林浩組長(光照寺住職)で開会。武石専行寺住職の調声で、「正信偈」(草四句目下)・念仏・和讃・回向を唱和しました。続いて廣瀬先生の法話が始まりました。

先生は、それぞれに分かりやすく小見出しをつけて「すでに真実の教えに出遇っているのに」「煩惱が雲や霧のように覆い隠している」「見えないところにこそ大切なものがある」「教えに会うと言うことは、本来のいのちにかえること」と、小道具を使いながら丁寧に話されました。

そして、特に「かんじんなことは見えない」について、サン・テグジュベリ作「星の王子さま」を紹介されながら話されました。



休憩後は「見えないところに大切なものがある」について、お寺の掲示板の「亡き親が残してくれた土地や財産が有り難いのではない、そのために流された汗と涙が有り難いのだ」や東井義雄先生(1912～1991、教育者・念仏者)の「のどちんこの話」、榎本栄一さん(1903～1998、詩人・念仏者)の「如来より賜りし眼鏡をかけて見ると 私のうしろの 功德の大宝海が見えてくる」等を紹介しながらお

## 親鸞のことば

選び取るのも、あなた 捨て去るのもあなた

この世は 念仏をとり て信じたてまつらんと、またすてんとも 面々の御はからいなり 歎異抄

人生は、選択の連続です。どれほど信頼できる人からアドバイスを受けたとしても、「この道を進むのだ」と決心し、現状から一步踏み出すのはあなた自身にしか出来ません。

親鸞は、たくさんの人に阿弥陀さまの本願を説き、念仏するように勧めました。そしてこんな一言もつけ加えたのです。

「信じるか信じないかは、あなたがたお一人おひとりが決めることです」。親鸞は人々を突き放しているように見えるかも知れませんが、念仏の教えを強制するのではなく、一人ひとりの教えへの目覚めを信じる、親鸞の人々へのあたたかい心があるのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

## 自分のせいにはしない

私たちは、何かが起こると、その原因を他に求めませんか。

自坊の即應寺のお彼岸に30年以上、法座を持つてくださった、藤園堅正師(松原市願久寺前住職、2017年2月遷浄)が、毎回紹介される言葉がありました。自分は、その言葉が耳にとりより、身に沁みついていて、時々思い出しています。先生が、ラジオ放送で聞かれた森繁久彌さん(1913年～2009年、俳優)の朗読された詩でした。「人は転ぶと石のせいにする。石が無ければ坂のせいにする。そして、坂が無ければ靴のせいにする。人はなかなか自分のせいにはしない」

折こ触れて、この言葉を思い出し、懐かしく先生を偲んでいます。合掌。(本)





話いただきました。

特に、先生が阪神淡路大震災の時に、ボランティア行かれた時のお話が心に残りました。

いつもの帰りの電車の中で、同行の先輩から「明日も出て来られる？」と言う問いかけでした。「帰ったら、風呂に入る？」「ご飯食べる？」等との問いかけから、自分がこうして毎日参加できるのは、奥さんの支えがあって出来ることであり、「自分がやっている」と言う慢心とボランティアは実は奥さんと共にだつたと気付かされたと言うお話でした。

閉会は池田英二郎副組長(宗恩寺住職)により、恩徳讃を斉唱して終わりました。

### 8/20所長巡回が



2024年8月20日(火) 午後6時から、天王寺区の光照寺(墨林浩住職・組長)で、大阪教区から禿信敬所長と教区スタッフが来訪、組内の住職と門徒会役員やあゆみの会会長など23名が参加して開催されました。

これは、7月に開催の「教区会」「教区門徒会」で承認された内容と宗派経常費の依頼と宗派の現状や教区運営方針の伝達等を説明の年間の行事です。真宗宗歌斉唱で開会、

まず、2023年宗派経常費完納表彰が禿所長から



第2組墨林組長に、続いて禿所長から重点事項のご説明があり、順次教区スタッフから宗派経常経費等について補足がありました。また、特に2025年に実施の『大阪教区宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要』については、2025年を慶讃法要Yearとしてイベントが取り組まれると、駐在教導から引き続き丁寧なご説明があり、詳細が決まり次第、ご連絡をいただくとのことでした。その後、若干の質疑応答があり、恩徳讃斉唱



で第1部を終了。お齋をいただきながら懇親会が行われ、今年の所長巡回が終わりました。

### 如是我聞 8/5聞法会 宮部先生の法話聞書 細川克彦(佛足寺)

宮部先生は第2組聞法会「初めての正信念仏偈」において、今回は、主に「釈迦章」の前半部分を話されました。



「如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんと成り」について、お念仏の教えは弥陀・釈迦の二尊教であると。

それはニュートンが万有引力の法則を発見したように、お釈迦さまが考えられた教えと言うのではなく、まず如来(真実)があつて、釈尊がそれに気づかれたのでであると。

そのことは『歎異抄』第2章の中で、「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず」に表されていると。

大阪教区 慶讃法要  
2025年(平成35年) 4月15日(火) 14時～17時

法要時間(法話含む)

午後2時～ 午後4時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後2時～ 午後4時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後2時～ 午後4時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後2時～ 午後4時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏
午後4時～ 午後6時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後4時～ 午後6時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後4時～ 午後6時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏	午後4時～ 午後6時30分まで 法話(宗恩寺) 山田 宗徳氏

4/20 御親修  
4/19 御直修  
4/20 参堂列  
4/19 帰敬式

また「松影の黒きは月のあかりかな」の俳句を紹介され、松の影の黒さによって、それを照らす月の明るさに気付く。それは煩惱のあるおかげで、真実に出会えるとも言える。

休憩後は「撰取の心光、常に照護したまう」から「雲霧の下、明らかにして聞きことなきがごとし」のところを、40年ぐらゐ前のジョージ秋山氏の漫画「浮浪雲」から紙芝居の体裁で引かれ、ユーモア

を交えながら話されました。時代は江戸時代後期、品川宿で流通業の棟梁をしていた「雲」と呼ばれる主人公と、その息子「新之助」の対話。「新之助」が、心が平静でいられるのはとっても難しいと嘆くと、「雲」は「それは無理です。心なんて無いんですから」と。人が考えると言うことは、それは西から東へ流れていく雲のようなもので、煩惱であると。心と言うのは、如来の撰取不捨の心をこそ、心と言うのである。人間が心と言っているのは、勝他・利養・名聞と言う煩惱であり、流れて止まらない。煩惱と言う雲や霧に覆われていても、青空は存在しており、雲や霧の下でも明るく暗闇ではないとお話いただきました。

